

洋13-125

「かぐや姫の物語」☆☆☆☆

2013（平成25）年11月8日鑑賞<TOHOシネマズ梅田・試写会>

監督・原案・脚本：高畑勲
製作：氏家齊一郎
脚本：坂口理子
原作：『竹取物語』
制作：星野康二、スタジオジブリ

<声の出演>

かぐや姫／朝倉あき
捨丸（かぐや姫の幼なじみ）／高良健吾
翁（かぐや姫の育ての父）／地井武男
媼（かぐや姫の育ての母）／宮本信子
相模／高畑淳子
女童／田畑智子
斎部秋田／立川志の輔
石作皇子／上川隆也
阿倍右大臣／伊集院光
大伴大納言／宇崎竜童
石上中納言／古城環
御門／中村七之助
車持皇子／橋爪功
北の方／朝丘雪路
炭焼きの老人／仲代達矢
2013年・日本映画・137分
配給／東宝

<あらためて「かぐや姫」の物語を復習してみると・・・>

『桃太郎』といえば〇〇の物語、『サルカニ合戦』といえば△△の物語、そして『かぐや姫』といえば、竹から生まれ成長し美しい姫になったかぐや姫が、求婚者たちを次々と袖にした挙句、満月の夜に月に帰ってしまうという物語。それくらいのは日本人なら誰でも知っているが、平安時代初期の10世紀半ばまでに成立したとされる『竹取物語』になると、少し高尚？また、なぜかぐや姫は月から地球にやってきたのか？なぜ結婚してくれと迫る男たちを袖にし、御門まで振ってしまったのか？そして、なぜ月に帰ってしまったのか？このように真正面から聞かれると、多分誰もその答えを出せないのではないだろうか？

本作制作の動機は、日本屈指のアニメ監督・高畑勲が半世紀も前からそんな疑問をもって脚本を書き、映画化を考えてきたことだ。プレスシートにも、チラシにも「半世紀を経て」という本作の原案と脚本を書き監督した高畑氏の「問題提起」があるが、そこでは「姫の犯した罪と罰」がテーマ。こうなると、単なる子供向けの「おとぎばなし」や「むかしばなし」ではなく、ドストエフスキーの世界であり、哲学の世界だ。高畑監督の問題提起の根本にあるのは、原作の『竹取物語』でかぐや姫は、月に帰らなければならなくなったことを翁に打ち明けたとき、「私は“昔の契り”によって、この地へとやってきたのです」と語ること、そして、迎えに来た月の使者は、「かぐや姫は、罪を犯されたので、この地に下ろし、お前のような賤しいものところに、しばらくの間おいてやったのだ。その罪の償いの期限が終わったので、こうして迎えにきた」と翁に言うことだ。へえ・・・『竹取物語』にそんな小難しい前提があったの・・・なるほど、なるほど。すると、そこでいうかぐや姫の「罪と罰」とは・・・？

<すべて知ってる展開だけに、少し退屈・・・？>

私はもともとあまりアニメは好きではないし、スタジオジブリの宮崎駿作品に格別の興味は持っていない。しかし、『風の谷のナウシカ』（84年）にしても『もののけ姫』（97年）にしても宮崎作品は宮崎監督の「哲学」が良くも悪くも如実に反映されているうえ、ストーリー自体が新鮮だからそれなりに面白い。それは、近時の『風立ちぬ』（13年）でも同じだ。しかし、『かぐや姫』の基本ストーリーは日本人なら誰でも知っているから、スクリーン上に登場する一つ一つの画や色彩がいくら美しくても、ストーリーの展開は少し退屈・・・？

もっとも、こんな登場人物もいたのか？また、こんな恋愛ストーリー（の伏線）もあったのか？と思うのが、捨丸（にいちゃん）（高良健吾）の登場だが、かぐや姫の父親となった翁（地井武男）がかぐや姫を都に連れていき「高貴な姫」に育てることを決意した後は、彼の存在感は遠くかつ薄くなっていく。山の中の生活で身に付けた鳥、虫、けもの、草、木、花を愛する、アルプスの少女「ハイジ」のような「自然児」から、「高貴な姫」に変身するため、人工的に施されるまゆ毛剃りとお歯黒の儀式を受けさせられる姿は痛々しいが、そこでの父娘の葛藤はそれなりに見どころがある。また、かぐや姫が少女から「女」に変身する日の、戸惑いの描き方もなるほどと感心させられる。しかし、斎部秋田（立川志の輔）から「かぐや姫」と命名されたことによって都中にその美しさの噂が広がり、石作皇子（上川隆也）、阿部右大臣（伊集院光）、大伴大納言（宇崎竜童）、石上中納言（古城環）、車持皇子（橋爪功）という5人の公達（きんだち）からの求婚を受けるストーリーになると、あまりにありふれた・・・。そしてまた、あまりに陳腐な・・・。

<あれも夢・・・？これも夢・・・？>

登場人物をはじめとする本作の作画はかなり独特な雰囲気、かぐや姫も自然児（野生児？）の面と、高貴な姫の両面がうまく表現されている。斎部秋田や御門（中村七之助）も一目惚れするほどの美貌は作画からもわかるが、媼（宮本信子）や教育係の相模（高畑淳子）、世話係の女童（田畑智子）などは下膨れの顔が美人とされた当時の時代を反映したためか、かなり太め。そして、キャラはそれなりに豊かだが、ハッキリ言って顔はかなりブス・・・。かぐや姫はそんな周りの人たちの中で成長していったわけだが、都中に美人の噂が広まり「名づけの祝宴」を三日三晩も続けて催した際、そのバカバカしさにキレてしまったかぐや姫は、突如失踪し、もとの野生児に・・・。さて、これからどんな展開になっていくのかなと思っていると、何とこれはかぐや姫の夢・・・。アレレ・・・？

もう一つ、本作では良くも悪くも捨丸がストーリー構成上大きな役割を担っているが、御門からの求婚（？）にとことん嫌気がさしたうえ、月へ帰らなければいけないことを悟ったかぐや姫は、またもやお屋敷を脱出。そして、こちらは今や結婚し子供までつくっている捨丸と再会し、これから2人で生きていくことを誓うのだが、そんなうまい話ってあるの？そう思っていると、何とこれも捨丸の一方的な夢・・・。アレレ・・・。

突如ストーリー構成を変えるについて「夢」を使うのは映画ではよくある手法だが、あれも夢？これも夢？ということになると、さて現実とは・・・？

<かぐや姫はなぜこの地に？なぜ再び月に？>

人間は男でも女でも、大なり小なり、思春期になると異性関係に悩みまた人生について悩むもの。しかし、『若きウェルテルの悩み』のウェルテルや、「萬有の真相は唯だ一言にして悉す。曰く、『不可解』」という『巖頭之感』を残して華厳の滝に飛び降りた藤村操ら、あまりに多感な若者を除き、多くの人間はその悩みの追及よりも現実との融和（現実への迎合？）が先に立ち、情性の日々を送る中で次第に無神経、無関係になっていくものだ。

かぐや姫の場合は、光り輝く竹の中から金銀や美しい衣装を次々と発見したことによって、これは天が姫を都へ連れ出せと命じていると解釈した翁の教育方針によって、野生児から高貴な姫への180度転換が計られたから、かぐや姫が戸惑いを覚えたのは当然。さらに、結婚なんてまだまだと思っていたのに、5人の公達から求婚されたり、挙げ句の果ては御門から抱きしめられたりすれば、大いに戸惑うのは当然だ。しかし、5人の公達からの求婚に対してあえて無理難題を与えることによって、5人が5人ともボシャってしまうと、さすがにかぐや姫の心の中に良心の呵責が・・・。さらに、御門の要求を拒否することなどこの世の人間は誰もできないから、そこで思わずかぐや姫が心の中で叫んだ言葉とは・・・？

子供の頃からあれほど一貫して鳥、虫、けもの、草、木、花を愛し、村の子供たちが歌うらべ唄をなぜか当然のように知っていたかぐや姫が、都での生活に溶け込めず、公達からの求婚に悩んだのは当然だが、なぜかぐや姫はこの地に・・・？そしてまた、なぜ急に再び月に帰らなければならなくなったの・・・？

<心に沁みわたる主題歌の歌詞をしっかりと！>

試写会では、上映前から二階堂和美が歌う本作の主題歌「いのちの記憶」が流れていた。ピアノ伴奏だけのシンプルなバラードだが、広島在住の浄土真宗の現役僧侶でありながら1997年からシンガーソングライターとしての活動を開始したという彼女の、透き通るようで力強い歌声は私の友人の女性歌手“うーみ”の歌と同じように、心に沁み渡るもの。この手の楽曲作りはインスピレーションさえ湧けばごく短時間ででき上がるのが常だが、プロダクションノートによれば「いのちの記憶」についても二度ほどの打ち合わせで高畑監督の求める曲を作り上げたそうだ。

高畑監督は本作のテーマを前述のとおりとしており、チラシにも「姫が犯した罪と罰」という大きな文字が躍っているが、私には本作からそこまでの意味を感じ取るのは難しかった。そして私には、むしろ二階堂和美が書いた「いのちの記憶」の歌詞の方が、本作のテーマにピッタリのような気がした。つまり、高畑監督の問題提起はかなり難解だが、「いのちの記憶」の歌詞は私には感覚的にピッタリきたわけだ。もちろんそれは、美しいメロディーラインのために歌詞も曲もすぐに覚えられることがあるのかもしれないが、いずれにしても本作を鑑賞するについては、二階堂和美が歌う心に沁み渡る主題歌の歌詞をしっかりと！